

ウエルベック批評の十年

サミュエル・エステイエ

(訳=八木悠允、西山雄二)

ミシェル・ウエルベックに関する最初の学術書、ミュリエル・ルーシー・クレマン『ウエルベック、精液と血液』¹が出版されてから十年が経つ。それ以後、三つの国際会議が開かれ、少なくとも八本の博士論文が学位授与され²、それ以外にも何本かの博士論文が執筆されており、約二十冊の研究書と数多くの論文が公刊されているが、これらはウエルベック批評の発展と活気を物語っている。このおおまかな数はこの研究対象の捉えにくい性質を示している。というのは、まずこの研究の総体を描き出すことが困難であり、次に、研究の資料そのものが現在進行形で増え続けているからである。さらに数量について言えば、この〔ウエルベック批評という〕主題に関しては二次文献よりも、ジャーナリストや作家たちによる記事や書

¹ Murielle Lucie Clément, *Houellebecq, sperme et sang*, Paris, L'Harmattan, 2003.

² Aurélie Pitault-Moreau, *L'Œuvre de Michel Houellebecq : une observation critique de la société*, Université François-Rabelais, 2004 ; Maud Granger Remy, *The Posthuman Novel*, New York University, 2006 ; Julia Pröli, *De(kon)struktion des Humanen Das Menschenbild Michel Houellebecqs aus einer existenzorientierten Perspektive aufgezeigt anhand seines Gesamtwerks*, Universität Innsbruck, 2006 ; Ludovic Jean Bousquet, *Michel Houellebecq : The Meaning of the Frigate*, University of California, 2007 ; Patrick Roy, *Une étrange lumière : la déchirure lyrique dans l'œuvre de Michel Houellebecq*, Université Laval, 2008 ; Jean-Baptiste Lavigne, *Entre réaction et utopie : Michel Houellebecq ou le paradoxe postmoderne*, Université de Savoie, 2009 ; Christian van Treeck, *La réception de Michel Houellebecq dans les pays germanophones*, Université de Provence, 2010 ; Jacob Carlson, *La Poétique de Houellebecq : réalisme, satire, mythe*, Göteborgs Universitet, 2011.

物³のほうがより重要である。この最後の指摘は重要である。ジャーナリスティックな批評が「ウエルベック現象」を一番初めに捕え、また、しばしばアカデミックな批評の後ろ盾になっているのだ。本論の争点のひとつは、この二つの立場の関係を問い質す点にある。

この十年は、より広い視野から見れば、大学での現代文学批評の「革新」の十年でもあった。フランスの分野におけるそのもっとも重要な企ては、2005年に出版され、2008年に増補版が出た『フランス文学の現在——遺産、現代性、変異』⁴という広大な分類の試みとして実現された。こうした観点からすると、非専門家たちによるウエルベックへの取扱に注意を向けることは有益だろう。

ウエルベック批評においては繰り返される三つの言説上の特徴があり、これが初期のウエルベック受容を貫く争点を明らかにしてくれそうだ。われわれの足取りはこの三つの特徴の標定を中心に構成される。第一に、アカデミックな批評とジャーナリスティックな批評のきな臭い対立について、いかなる理由でわれわれは語りうるのか、ということについて確認する。そして第二に、ウエルベックの作品の専門家たちによって重視された解釈の様式に注意を向けよう。そして最後に、この作家についての批評的言説がもたらした寄与について検討する。

ジャーナリスティック批評からアカデミック批評へ

ウエルベックへのアカデミックな扱い方の裾野を広げたクレマンに先立って、いくつかの論文とジャーナリストによる二冊の書物が存在する。ウエルベックについての最初のアカデミックな論文は当時の状況に強く特徴づけられている。例えば、

³ ブログやチャットルーム、ネット上のコメントなどは、三次資料的な調査対象となりうるかもしれない。インターネット上のサイト「ミシェル・ウエルベック友好会 [Association des Amis de Michel Houellebecq]」(1999-2006) が姿を消してしまってから、ネット上の光景は随分と変わってしまった [わずかなアーカイブは、以下のサイトから閲覧可能。URL : <https://www.houellebecq.info/amhadherer.php> 参照日 : 2017年12月17日]。

⁴ Dominique Viart et Bruno Vercier, *La littérature française au présent. Héritage, modernité, mutations* [2005], Paris, Bordas, 2008.

この人騒がせな作家についての言い訳があまりに頻繁に活用されたのである。同じように、2004年の春にはメディアの熱狂によって、アカデミックな世界へのウエルベックの紹介に決定的な役割を担ったガヴァン・ボウはこの作家についての初のシンポジウムを組織しようと決断したのだった⁵。

さて、この作家についての論争が最高潮になった2001年ごろから話を始めよう。出自がじつに様々な最初期の研究者たちはジャーナリスティックな批評を一段高い視点から見て、大幅に拡大したウエルベック受容を研究対象とみなした点で際立っている。ジャック・アベカシス⁶は、1998年の秋頃の「ウエルベック事件」⁷に改めて触れ、文体論の基準からこのスキャンダルを説明している。これに対して、フレ

⁵ ボウは論集『ミシェル・ウエルベックの世界』の前書きでこう述べている。「率直に記しておきたいのだが、2004年の春、ウエルベックがまるで〔サッカー選手の〕ジダンのように、ラガルデル・グループ傘下の出版社に「移籍」し、彼の新作小説（それは「すぐにでも」映画製作に入るだろうと報道陣に触れ込まれており、2006年5月のカンヌ映画祭への出品もすでに予想されていた……）の出版の告知が大々的に報道されたのを受けて、わたしは教育者として、翻訳者として、そしてこの「ウエルベック現象」の味方として決断したのです、すでによく知られたウエルベックの作品に関する最初のアカデミックなシンポジウムを開く時が来たのだと。」(Gavin Bowd, « Avant-propos », *Le monde de Houellebecq*, dir G. Bowd. Glasgow, University of Glasgow French and German Publications, 2006, p.X.)

⁶ 「しかし、統辞論は意味論よりも恐ろしいものなのだ。こういうわけで、マリー・ダリュセックでもイェゴール・グランでもなく、ウエルベックこそが、ちょっとしたドクサの論争の枠内にとどまるキケロー的な小競り合いにすっかり満足し、それ自身のイデオロギーに満足し切っている文化状況を震え上がらせたのだ。」Jack Abecassis, « The Eclipse of Desire: L'Affaire Houellebecq », *MLN*, n°4, September 2000, p. 826. このように、ウエルベックのスキャンダルや成功、あるいはもっと単純に彼の「衝撃」を説明することは、ジャーナリスティックなものにせよアカデミックなものにせよ、ウエルベック批評のライトモチーフとなっている。

⁷ この「ウエルベック事件」には二つの側面がある。それは雑誌「垂直〔*Revue Perpendiculaire*〕」の編集委員会によるウエルベックの排除と、キャンプ施設「可能性の場」の施設長によるウエルベックの小説『素粒子』の出版差止め嘆願である〔前者は『素粒子』の政治性における対立によって引き起こされたのに対し、後者は小説中でキャンプ場がフリー・セックスの舞台として描かれたことへの抗議である〕。以後も、ウエルベックの新作小説の出版の度に「事件」が巻き起こってきた。

デリック・サエナン⁸、アラン・ブザンソン⁹、そしてリタ・ショベール¹⁰は、ウエルベック作品における現代の現実の社会的な分析の卓抜さによってその成功を正当なものだとしている。ジェローム・メゾは綿密かつユニークな論文¹¹の中で、ウエルベックに関する論争を、文学の発展プロセスおよび小説と道德の関係の歴史の中に位置づけなおしている。メゾはこの作家にとっての意味深長な曖昧さをその作品だけでなくインタビューにおいても示した後、ブリュノ・ブランクマンとジャン＝ブノワ・ピュエシュに依拠しながら、「ウエルベック」の立場が、シリーズのそれに近いと結論づけている。

実際、「ウエルベック」が登場人物や語り手の意見を取り入れるのは、『プラットフォーム』の出版のあとである。別の言い方をすれば、この筆名の下¹²の作者は、彼の創作に引きずられているのだ。「ウエルベック」の立場

⁸ 「「ウエルベック症候群」という認識について、弁護しよう……彼は「中間管理職」という社会的カテゴリーを最初に描写した人物である。このカテゴリーの内部で、彼は「中間管理職」のプロフィールを自己を文学において発展させて、アンチ・ヒーロー（例えばブリット・イーストン・エリスのバトリック・バートマン）を仕立て上げることなく、存在論的な意味でその現実に接近したのだった。」Frédéric Saenen, « Sur l'écriture de Michel Houellebecq », *Anales de Filología Francesa*, n° 10, 2001-2002, p. 167.

⁹ 「要するに、今日溢れかえっている社会批評というものは、わたしの認識によれば、現代フランス文学がほとんど顧みないジャンルである。いやそれどころかむしろ、頭の中にしか存在しない社会についてひどく間違った批評を現代フランス文学はおこなってきたのだ。ウエルベックは調査に基づく実直な仕事をした。それがトーマス・ウルフほど驚くべきものではないにせよ、ひとりのフランス人作家が、それなしではこのジャンルが衰退してしまう、社会の基礎を小説に与えているということは悪いことではないのである。」Alain Besançon, « Houellebecq », *Commentaire*, n° 96, 2002, p. 943.

¹⁰ 「しかし、ひとつ確かなことがある。これら二つの小説 [ウエルベックの『素粒子』とベグベデの『99フラン』] の中にも、そしてその後の長期の中断の後にも、現代社会の問題の文学的な表現が、ゾラがその時代に範例を示したのとまったく同様に、フランス的な語りの最良の伝統的な形で現れているのである。」Rita Schober, « Renouveau du réalisme? Ou de Zola à Houellebecq? Hommage à Colette Becker », *Auf dem Prüfstand. Zola-Houellebecq-Klemperer*, Berlin, tranvia - Verlag Walter Frey, 2003, p. 207.

¹¹ Jérôme Meizoz, « Le roman et l'inacceptable : polémiques autour de *Plateforme* de Michel Houellebecq », *Études de lettres*, n 3-4, décembre 2003, pp. 125-148.

とは、「社会的に許容（不）可能な」事柄に対して、彼が物語ることを任せたアンチ・ヒーローというキャラクターを公共空間で機械的に再演することなのである。一風変わった逆転によって、虚構の振る舞い（語り手の話）は社会的な振る舞い（作家の立場からの話）に先立ち、後者の振る舞いを生み出しているように見えるのだ。[...] セリーヌを取り巻く論争と比較しないわけにはいかない。セリーヌという筆名の下での彼の立場は、ジャーナリストたちの前で、その小説に登場する侮蔑的で悲観的なフェルディナンドを再演したのだ¹²。

メゾによれば、「ウエルベック」の立場は同様に、「現代文学界の新たな状態」を明らかにしている。この文学界では、「大衆文化の時代に生まれた若い作家の世代全体（アンゴ、バグベデ、デバントあるいはウエルベック）が今後、彼ら自身と彼らが書いたものについての頻繁な論争を通して、作家像の公的な演出を十分に引き受けていく」のだ。メゾは論文をこう締めくくっている。

この見世物の世界にあっては、何らかの良心の裁きへのいかなる参照も時代遅れである。現代アートから借用してきたテクニクに従って——語り手ミシェルは前衛芸術の展示を文化省のために企画しているのだ！——、これらの作家たちは自分の人格を過剰にメディア化し、作品空間に含み込んでしまう。彼らの書くもの、そして彼らを世に知らしめるその立場は連動して、唯一のパフォーマンスとして上演されるのだ¹³。

この仮説は比較的有力なものではあるが、ウエルベック研究者たちの間に実際の議論を巻き起こすことはなかった¹⁴。とはいえ、ギヤスパール・ツュラン¹⁵は、ウエルベックとビュルギャラによる音楽アルバム『人間的存在』¹⁶（2000年）についての

¹² *Ibid.*, p. 142.

¹³ *Ibid.*, p. 143.

¹⁴ 例外として、クリスチャン・ヴァン・トレークによるウエルベックのドイツ語圏における受容についての博士論文がある。Christian van Treeck, *La réception de Michel Houellebecq dans les pays germanophones*, Université de Provence, 2010.

最近の論文でこの仮説の限界を指摘している。ツェランはメゾの仮説の限界を考慮に入れながら論じている。この仮説がその有効性を失うのは、ウエルベックの他の芸術作品、とりわけ、楽曲中で朗読される詩からなるアルバムにまで資料を広げたときである。

ところで、『人間的存在』は多くの点から見て、彼の立場の影響下で書かれたウエルベック作品とは異なっているように思われる。このアルバム製作という制約内で、誠実さと打算という二つの観念を対立させ、前者が後者よりも優れているのだと宣言するのは無駄だろう。だが反対に、『人間的存在』の読解から「良心の裁きへの参照」が排除されていないことが分かるだろう¹⁷。

ほかにも、異なる仕方でウエルベックの受容の問題に取り組んでいるいくつかの論文がある。これらはウエルベックに関する批評にとって無視できない一角を形成している¹⁸。ヴァンサン・ギアデ¹⁹は過度に孤立したウエルベックのイメージを訂正し、オリヴィエ・バッサール＝バンキ²⁰は出版社の選択に至るまでのウエルベック

¹⁵ Gaspard Turin, « 'Il faudrait que je meure ou que j'aïlle à la plage'. Effets de posture et soupçon de bonne foi dans *Présence humaine* de Houellebecq et Burgalat », *Fixxion*, n° 5, 2012. 以下のリンクから参照可能。URL : <http://www.revue-critique-de-fixxion-francaise-contemporaine.org/rcffc/article/view/fox05.06/655> (参照日 : 2013年5月29日)

¹⁶ [訳注] Michel Houellebecq, *Présence humaine*, Tricatel, 2000 [CD]. 本論で触れられているビュルギャラ (Bertrand Burgalat) は楽曲編集を務めている。

¹⁷ *Idem.* また、音楽アルバム『人間的存在』については、アンドリュウ・ハッセイの論文も参考のこと。Andrew Hussey, « *Présence humaine* : Michel Houellebecq, poète-chansonnier », *Le monde de Houellebecq, op. cit.*, pp. 59-70.

¹⁸ メディア化されたウエルベックは、ドイツ人ジャーナリスト、トマス・シュタインフェルドによる先駆的な書物の核心を占めている。Thomas Steinfeld, *Das phänomen Houellebecq*, DuMont Reiseverlag, 2001.

¹⁹ 「実際のところ、ミシェル・ウエルベックは「独りでみんなに逆らっている」作家ではない。ジャーナリストのコメントは彼の立ち振舞いの奇妙さにこだわってきたのだが。」 Vincent Guider, « L'extension du domaine de la réception. Les appropriations littéraires et politiques des *Particules élémentaires* de Michel Houellebecq », *Comment sont reçues les œuvres. Actualités des recherches en sociologie de la réception et des publics*, dir. I. Charpentier, Grane, CREAPHIS, 2006, p. 179.

の一貫性を明確化している。

2003年は、ジャーナリストかつ作家で、ウエルベックの友人でもあるドミニク・ノゲーズによる『ウエルベックの実態』²¹の刊行年である。この書物は、ウエルベックに関するノゲーズの日記の数頁と、メディアに寄稿した論文を集めたものである。そのうちの三つの文章には日付が振ってある。一番初めの「小説における新たなトーン」²²は「キャンゼーヌ・リテレル [La Quinzaine littéraire]」誌の1994年10月1日号に発表された。ウエルベックの最初の小説『闘争領域の拡大』が出版されたときである。この論文がウエルベック批評の歴史において重要なのは、ここで初めて「スーパーマーケットのボードレール」²³という後に有名になった表現が使用されたからである。またこの論文が、ウエルベック批評の本当の決まり文句となっていくもの、つまり、彼の文章のいわば両極端な側面、「その声調における凶暴さと平穏さの興味深い混合」²⁴を初めて確認したからである。このような二極性に関しては、1995年2月の対話²⁵で作家自身によって主張され、それから2004年以降には

²⁰ 「その出版社選定の過程で、ウエルベックは最も裕福な者の法則について、「[わたしは大企業が好きなんです]と」こう静かに褒め称えた。[...] バラ色の人生を眺め、希望の根拠を得る権利を読者に否定する本、乾いていてどす黒い作品を書いているとウエルベックを非難することはできるかもしれないが、彼が公明正大に振る舞わないのだと、また、これみよがしの成功を享受している時でさえ、彼はけばけばしい光の下に姿を見せないのだと非難することは難しいのだ。」Olivier Bessard-Banquy, « La vie editoriale de Michel Houellebecq », *Le monde de Houellebecq, op. cit.*, pp. 18-19.

²¹ Dominique Noguez, *Houellebecq, en fait*, Paris, Fayard, 2003.

²² *Ibid.*, pp. 30-35.

²³ *Ibid.*, p. 30. この呼び方を考案した人物はまだ特定できておらず、ウエルベックはある対話でこう告白している。「この表現を一番に用いたのは、誇大妄想の発作に駆られていたわたしだと思います。とはいえ、そう確信を持っているというわけでもありませんが。」« Michel Houellebecq, Imperturbable », *Le magazine des livres*, n° 27, novembre/décembre 2010, p. 14.

²⁴ *Ibid.*, p. 31.

²⁵ 「より文学的な次元で、わたしは二つの相補的なアプローチが必要だと強く感じています。それは、感動的なアプローチと、臨床的なアプローチです。一方は、解剖であり、冷静な分析であり、ユーモアです。もう一方は、直接的な叙情性との感情的で情熱的な融即〔異なるものを区別することなく同一化して結合する心的原理〕です。」Michel Houellebecq, « Entretien avec Jean-Yves Jouannais et Christophe Duchâtelet », [1995], *Interventions 2*, Paris, Flammarion, 2009, p. 61.

ブリュノ・ヴィアールによって体系的に発展して論じられることになる²⁶。

ノゲーズの第二の主要テキストは、ウエルベックの文体を分析したもの²⁷であり、これは1999年の6月から12月にかけて、雑誌「小説のアトリエ [L'Atelier du roman]」で連載されたものの完全版である。ノゲーズの仮説によると、ウエルベックの作品とは「たくさんの「事実」——あるときは汚辱の事実、またあるときは悲痛なまでに正確な事実——、ただし、あらゆる場合において、真の言説を作り出す事実である。これは作品の意味にとって、あるいは、こう言いたければ、作品の重心にとって些細なことではないのだ」²⁸。ウエルベックが文体として「その弓にいくつもの弦を張っている」（詩人、エッセイスト、小説家）ならば、もっとも重要な弦はエッセイストとしての弦である。

それ〔エッセイストとしての弦〕がおそらく彼の文体の真の姿だ。その証拠に、彼のエッセイの典型的な特徴は彼の詩の中にも（例えば、詩集『闘争の感覚』²⁹の中の詩「自由主義に対する城壁」）、小説の中にも（特に『素粒子』）見られるのだ。同じく、彼の小説のタイトル自体が、機知に富んだ感傷的な言葉や社会的な出世ドラマというよりも、マルクス主義的な社会学の著作や粒子物理学の著作を告知している……。

この観点から、ノゲーズは「無秩序への接近」³⁰をもっともウエルベックらしいテキストだとみなしている。

われわれの気を引き続けるだろうノゲーズの最後の三つ目の文章は、見たところ

²⁶ 「つまり、彼の小説の中には二つの錯綜した声がある。ひとつは、モラルの話題になった途端に自分のピストルを抜いてしまう人々を憤慨させるほどの厳格なモラリストの声であり、もう一方は、のべつなしに若い売春婦にフェラチオをさせることしか考えない深刻な神経症患者の声である。」 Bruno Viard, « Houellebecq du côté de Rousseau », *Michel Houellebecq*, dir. S. van Wesemael. Amsterdam/New York, Rodopi, 2004, p. 130. このヴィアールの隠喩的な文体は、ジャーナリスト達の使う文体を思い起こさせる。

²⁷ Noguez, *Houellebecq, en fait*, op. cit., pp. 97-154.

²⁸ *Ibid.*, p. 150.

²⁹ [訳注] Michel Houellebecq, *Le Sens du combat*, Flammarion, 1996.

³⁰ Michel Houellebecq, « Approches du désarroi », [1992], *Interventions 2*, op. cit., pp. 21-45.

大変逸話的なのだが、これまた一般化可能である。ちょうど「ウエルベック事件」があった頃の、1998年10月29日の「ル・モンド」紙に発表された「未読への情熱／未読への激怒 [la rage de ne pas lire]」³¹である。ノゲーズはこの「未読への情熱／未読への激怒」という概念を、『素粒子』の受容の際に起こった「非難轟々の」一連の反応を明確にするために作り出した。この概念はのちに、ジャーナリスティックな場から、生まれつつあるアカデミックな場へと移っていくことになる。今日では、この概念こそがウエルベック研究者たちの「立場」、彼らに一致する叫びを象徴していると言うことができる。事実、このノゲーズの記事から十五年ほど後、エクス＝アン＝プロヴァンスとマルセイユにおけるシンポジウムの後に、ブリュノ・ヴィアールは「ヌーヴェル・オブセルヴァトワール [Le Nouvel Observateur]」³²誌のインタビューに答えて、ウエルベックが「きちんと読まれていない」という考え方を支持している。ウエルベックがきちんと読まれていないという意見を擁護する方法は数多くある。「未読への情熱／未読への激怒」はそのうちのひとつであり、そしてまさに、この表現の多義性がウエルベックの専門家たちをひとつにするのだ——いうまでもなく、非専門家たちによって、彼らが論戦へと立ち戻る場合を除いてだが。

ミュリエル・ルーシー・クレマンはウエルベックに関して三つのエッセイ³³と十本ほどの論文を刊行した。統計学的手法³⁴や「クローズ・リーディング」、間テキスト性などの手法を用いる彼女の関心は、ウエルベックの小説の性的な次元にある。『ウエルベック、精液と血液』の中で彼女が主張する仮説では、ウエルベックとい

³¹ Noguez, *Houellebecq, en fait, op. cit.*, pp. 78-85. [名詞rageは「激しい怒り、激烈さ」「熱狂、激しい情熱」を含意するため、「la rage de ne pas lire」はウエルベックを読むまいとする情熱とウエルベックを読まないことに対する激怒と両義的に解することができる。]

³² « Houellebecq est mal lu! », *BibliObs*, 11.05.2012. 以下のリンクから参照可能。URL : <https://bibliobs.nouvelobs.com/romans/20120511.OBS5369/houellebecq-est-mal-lu.html> (参照日：2013年5月29日)

³³ *Houellebecq, sperme et sang, op. cit.* ; *Michel Houellebecq revisité. L'écriture houellebecquienne*, Paris, L'Harmattan, 2007 ; *Michel Houellebecq. Sexuellement correct*, Sarrebruck, Éditions Universitaires Européennes, 2010.

³⁴ 『ウエルベック、精液と血液』には、付属資料として『闘争領域の拡大』『素粒子』『ランサローテ』『ブラットフォーム』におけるすべての性的な表現のリストが収められている。

う作家は正反対のバイア・バンマフムード³⁵の一種なのだという。

ウエルベックの小説では、反復されるセックスの場面はある傾向を隠している。それらの場面は、登場人物たちのイデオロギーに隠れ蓑を与えている。そのどぎつさで目をくらませ、あらゆる読者を盲目にし、そして読者は耐え難さを受け入れられるように巧みに操作される³⁶。

クレマンは、ウエルベックが各登場人物の性格の二十パーセントだけ、つまり「影の部分」だけしか描かないのだと付け加えることで、彼を「救い出す」。こうした留保はのちにヴィアールにも影響を与えることになる³⁷。フランク・シュエルウェゲン³⁸はセックス場面の「実用的な」役割にまで研究をさらに進めている。その数の多さと、それらが〔ポルノという〕ジャンルの規範にあからさまに一致して描かれているため、セックス場面は商業的な合目的性に従っているのである。

もしわたしの考えをまた別のやり方で言うてよいならば、こう付け加えたい。セクシャリティとは、ウエルベックにおいてはマーケティングのようなもので、「ケツ」という単語は本を売するのに役立つのだ³⁸。

ここにきて、われわれはウエルベック批評の内部にある断層に近づいている。それは、幾人かのウエルベック専門家を、アンチ・ウエルベックを掲げるジャーナリ

³⁵ ミシェル・レクレルクによるフランス映画「人々の名前 [Le Nom des gens]」（2010年）〔日本語版は、ミシェル・レクレルク監督・脚本『戦争より愛の関係』、オンリー・ハーツ、2012年 [DVD]〕において、女性の登場人物バイア・バンマフムードは右派思想の男性たちの思想を変えるために彼らと性交を重ねる女性として描かれている。

³⁶ Clément, *Houellebecq, sperme et sang, op. cit.*, p. 192.

³⁷ 「彼 [ウエルベック] のものの見方がどれほど正当であろうとも、自分のほほ笑んだ側面を完璧に無視して、苦虫を噛み潰したような横顔にしか自由を見出さないので、彼の態度は根本的に偏向している。」 Bruno Viard, *Houellebecq au laser. La faute à Mai 68*, Nice, Ovidia, 2008, p. 120.

³⁸ Franc Schuerewegen, « He Ejaculated (Houellebecq) », *L'Esprit Créateur*, volume 44, n° 3, automne 2004, p. 47.

ストたち³⁹に近づける断層である。アンチ・ウエルベックのジャーナリストたちはいくつかのニュアンスと数々の議論とともに、ウエルベックの作家としての地位に異議を申し立てているが、こうした点についてここで展開させると冗長になってしまうだろう。

2004年にはウエルベックについての初の論文集が刊行された⁴⁰。この論文集は作家との未発表インタビューで始まるので、一見すると、ウエルベックの自作に関する談話にアカデミックな批評を従属させているようである。だが、もっとよく見てみよう。ウエルベックのオランダ語翻訳者であるマルタン・ドゥ・ハーンが質問者である。大学人によるこの作家へのインタビューはいまだにまれである⁴¹。彼の作家としての権威についてなにか結論を出す論文も少ない。それゆえ今となつてはここに、彼の思想からためらわずに距離を置こうとするという方向性に、ウエルベックの批評のさほど正統的とはいえない傾向をもつ特徴の別の証拠が見て取れることだろう。

ゆるやかな間テキスト性と反射的パラフレーズ

サビーヌ・ヴァン・ヴァゼマエルはウエルベックに関して二冊のエッセイと約

³⁹ Denis Demonpion, *Houellebecq non autorisé, enquête sur un phénomène*, Paris, Maren Sell, 2005 ; Eric Naulleau, *Au secours, Houellebecq revient! Rentrée littéraire : par ici la sortie....* Paris, Chiflet & Cie, 2005 ; Jean-François Patricola, *Michel Houellebecq ou la provocation permanente*, Paris, Archipel, 2005 ; Claire Cros, *Ci-gît Paris. [L'impossibilité d'un monde]*, Paris, Michalon, 2005.

⁴⁰ *Michel Houellebecq*, dir. S. van Wesemael, *op. cit.* また2007年には二冊目の論文集が刊行された。 *Michel Houellebecq sous la loupe*, dir. M. L. Clément et S. van Wesemael, Amsterdam/New York, Rodopi, 2007.

⁴¹ その例外として、アガト・ノヴァク＝ルシュヴァリエの仕事が挙げられるだろう。 Agathe Novak-Lechevalier, « Entretien avec Michel Houellebecq », *Le Magasin du XIX^e siècle*, n° 1, 2011, pp. 7-21. 2012年のマルセイユでのコロックを締めくくった円卓会議の様子は以下のリンクから参照可能である。 http://sites.umv-provence.fr/webtv cible.php?urlmedia=houellebecq_a_050512. [現在はリンク切れ] この会議でブリュノ・ヴィアールがウエルベックに投げかけた最初の質問は、アカデミックな批評のある種の当惑を示している。「ミシェル・ウエルベックさん、わたしたちのところへ、何をしに来たのですか。」

十本の論文を書いている⁴²。ヴァゼマエルの研究手法は二重で、間テクスト性と精神分析⁴³である。手法としての間テクスト性への回帰は、クレマン以後、われわれを次の観察方法へと導いてくれる。つまり、ウエルベック批評の主要な解釈学的手法とは比較の方法である。この作家と比較された作家のリストはすでに長いものになっている。この観点から言えば、ブリュノ・ヴィアールも例外ではない。しかしながら、ほとんどの場合、これらの比較の試みによって分かるのは、ウエルベックを作家として位置づけることの難しさなのだ。

現代において一例だけあげてみると、ウエルベックの事例とミニマリストの作家たち⁴⁴の事例は大変異なっている。ミニマリスト作家たちがフランスにおいてアカデミックな名声を大変早く⁴⁵かつ広範に手に入れたこと、ウエルベック自身に関係する主要人物のいくつかの話題⁴⁶、そして文学領域において彼を「ある派閥に属させることを困難」——ヴァンサン・ギアデの表現⁴⁷——にするその「複数の立場」のことがあるが、それら以上に、「流派」の問題はウエルベックに関して言えば

⁴² その著作は以下の通り。Michel Houellebecq. *Le plaisir du texte*, Pans, L'Harmattan, 2005 ; *Le roman transgressif contemporain : de Bret Easton Ellis à Michel Houellebecq*, Paris, L'Harmattan, 2010.

⁴³ 「第三章において、わたしたちが強調するのは、ウエルベックのはじめの二つの小説に現れる無意識の複雑さ、葛藤の核が去勢の脅威であるということである。」Van Wesemael, *Michel Houellebecq, op. cit.*, p. 25. 同様の論調に関しては、精神分析家のミシェル・ダヴィッドの著作を参照されたい。Michel David, *La mélancolie de Michel Houellebecq*, Paris, L'Harmattan, 2011.

⁴⁴ ここではフィエーク・スコーツの著作を参照している。Fieke Schoots, '*Passer en douce à la douane*'. *L'écriture minimaliste de Minuit*, Amsterdam/Atlanta, Rodopi, 1997.

⁴⁵ 2003年に開かれたミニマリスト作家についてのスリジー〔・ラ＝サール〕でのシンポジウム。

⁴⁶ 「わたしはといえば、実に薄っぺらい最終的な成果のために、「ミニユイ社のフォルマリスト」とかいう連中が技巧を濫用する様子を、胸を締め付けられることなく眺めることがけっしてできませんでした。」Michel Houellebecq, « Lettre à Lakis Proguidis », [1997], *Interventions 2, op. cit.*, p. 153. 「わたしはロブ＝グリエの『新しい小説のために』が好きです。なぜならそこでは、ヌーヴォー・ロマンが表現する間違いの幅が、この上なく明瞭に現れているからです。」« Michel Houellebecq. Imperturbable », *art. cit.*, p. 8.

⁴⁷ Guiader, « L'extension du domaine de la réception », *art. cit.*, p. 178.

やっかいなものだ⁴⁸。

彼の作品の非専門的な批評家による分類は、この点に関しては有益である。『フランス文学の現在』の「現代の個人主義」と題された章で、ウエルベックは「冷笑的で、誹謗と呪詛を書く作家」の一員だとみなされている。別の言い方をすれば、ウエルベックは、お互いがとても異なっていると自分たちで明言している分類し難い作家たちの中にいるのだ⁴⁹。非専門家によるウエルベックの読解はなんらかのライトモチーフに収斂される。それは悲観主義、平板な文体、曖昧さ⁵⁰、喜んで期待を裏切るような文学⁵¹、冷笑主義⁵²などであり、これらは作品自体への実際のあ

⁴⁸ とはいえ思い出しておきたいのだが、最初の小説が刊行された頃、ウエルベックは、同時代のいく人かの現代作家たち、とりわけヴァンサン・ラヴァレック、マリー・ダリュセック、イエゴール・グラン、さらにヴィルジニー・デバントたちとむしろ直接つながっているかのように登場したかもしれない。ウエルベックの研究史にとって重要なル・モンド紙の記事「文学における新たな傾向」（« Une nouvelle tendance en littérature », *Le Monde*, 3 octobre 1998）の中で、フレデリック・バドレは、「ポスト-自然主義」作家の旗のもとでこれらの作家たちを取りまとめていた。これら作家たちの相違した軌道と、この旗名への無関心によって、彼らはすぐに袂を分かっていった。

⁴⁹ 「つまり、もっとも「セリヌ的」（フィリップ・ムライ）文体からもっとも平板な文体へと移行する彼らの文体からではなく、彼らのお互いの立場によってのみ、彼らをひとりひとり見分けることができるのだろう。」Viart et Vercier, *La littérature, op. cit.*, p. 362.

⁵⁰ 「だが、抜け目のない人間であるこの作家は断言を下さない。嫌悪の文学のしばしば燃え立つような伝統に組み込まれたフィクションは、最後に手のひらを返すのだ。」Bruno Blanckeman, *Les fictions singulières, étude sur le roman français contemporain*, Paris, Prétéxte, 2002, p. 33. 「だが彼 [ウエルベック] の個人的な立場は決して明確ではない。というのは、彼の書物に表された、しばしば挑発的な（スターリン主義、優生学支持、人種差別、女性蔑視……）理論のことごとくが、曖昧であるか、あるいは議論の余地のある語りの声のために明瞭ではないからである。その声は、例えば、未来の新たな人造人間、強迫観念で倒錯して狂気じみた学者の声である。ウエルベック自身、その対話の中では、登場人物たちを説明するというよりも、彼らを具現化しているように見える。だから、『素粒子』が予告する科学的ユートピアが恐れるべきものか、それとも希望をもたらすものか、読み解く術がないのである。」Viart et Vercier, *La littérature, op. cit.*, p. 360. これはメゾの仮説の発展した形と言えるだろう。

⁵¹ 「『素粒子』は」人に気に入られないために着想された [….]」Blanckeman, *Les fictions singulières, op. cit.*, p. 31. 「ウエルベックは、自然にがっかりさせられるようなエクリチュールの形式を練り上げている。」Viart et Vercier, *La littérature, op. cit.*, p. 359.

らゆる分析を妨げるような標識となる。

より丹念な仕方、ウエルベックの専門家たちは類縁性や系譜を発見しようと努めてきた。これらの努力は明らかに、正統化への意欲から来たものだ。リザ・スタイナーは自著『サド——ウエルベック、閨房からセックス・ショップへ』の中で、この二人の作家の総体的な相違を論じている⁵³。他の系譜——今度は明確な系譜——については、いくつかの名前だけを引用するなら、ルソー、バルザック、ショーペンハウアー、プルーストとの系譜がときおり現れる。

とはいえ、こうした比較を確かなものとみなす前に、ウエルベックの専門家が間テキスト性から作り上げる概念を問う必要があるだろう。例えば、ヴァン・ヴェゼマエルはバルトを援用しながらこう書いている。「われわれは〈間テキスト性〉というラベルで、二つ以上のテキスト間のありうべき関係性を整理する。バルトとともに、われわれは無数の入口を持つネットワークのような文学を考察するのである」⁵⁴。ブリュノ・ヴィアールはその解釈学的な好みを正当化しようと彼のやり方で誇張してこう言っている。「これら垂直方向の読解は、ウエルベックの資料体と保っている読解の揺らぎが原因で生じたのである」⁵⁵。おわかりのように、間テキスト性の非常に自由な——過度に愛想がよい、とは言うまい——考え方が問われていて、この場合、「無数の入口を持つネットワーク」も「揺らぎ」も選択の位置を占めているのである。

ウエルベック批評において繰り返えられる言説上の第一の特徴は、引喩の性向やほとんど問題視されないテキストへの関わり方である。この場合、分析のカテゴリーは柔軟すぎるほどであり、またその文脈化は素早く行われる。一般的に言っ

⁵² 「この時代の冷笑的な雰囲気 […]」Blancman, *Les fictions singulières*, op. cit., p. 32. 「冷笑主義はこのように、ここ何年間か比較的成功を取ってきた […]。」Viart et Vercier, *Littérature*, op. cit., p. 362.

⁵³ 「サドが精力と力の哲学者であり続け、社会や制度を放蕩な言葉で挑発することを厭わないのに対して、ウエルベックは現代の風刺作家のようであり、性や知性に関する現代の悲惨さを暴く。」Liza Steiner, *Sade-Houellebecq, du boudoir au sex-shop*, Paris, L'Harmattan, 2009, pp. 194-195.

⁵⁴ Van Wesemael, *Michel Houellebecq*, op. cit., p. 20.

⁵⁵ Bruno Viard, *Les tiroirs de Michel Houellebecq*, Paris, PUF, 2013, p. 9.

て、この専門化された批評は1960年から70年にかけての「文学理論」⁵⁶の航跡に含まれている。文学の自律性、解釈行為の自由、そしてテキストの外部に対するテキストの独立性は相変わらず支配的である。

ここで、われわれがすでに指摘した、ウエルベック批評のさほど正統的とはいえない傾向をもつ特徴の第二の手がかりが問題となる。実際、ウエルベックによれば文学という概念は、バルトの用語を繰り返すならば、意味の宙吊りを合目的とする言語についての作業とは正反対のものなのだ⁵⁷。ヴァン・ヴェゼマエルや他の専門家たちによる精神分析的な読解格子は三つ目の手がかりである⁵⁸。四つ目の

⁵⁶ Vincent Kaufmann, *La faute à Mallarmé. L'aventure de la théorie littéraire*, Paris, Seuil, 2011.

⁵⁷ 「[...] 詩は別のやり方で世界を語るが、それは、人間が世界を知覚するように、世界を完全に語るのである。」Michel Houellebecq, « L'absurdité créatrice », [1995], *Interventions 2, op. cit.*, p. 75. 「[...] 文章を生産することを目的とする言語についての作業が文学だというあの馬鹿げた考え」« Lettre à Lakis Proguidis », *art. cit.*, p. 154. 「[...] われわれが練り上げることができる世界に関する理論的な考え方に対して自分の文学を開くことで、わたしは自らをクリシェの危険へと晒している——そして実を言えば、わたしはそうすることを余儀なくされていて、私の唯一の独創的なチャンスとは（ボードレールの言葉を使えば）、新しいクリシェを練り上げることなのである。」« Coupes de sol », [2008], *Interventions 2, op. cit.*, p. 282.

⁵⁸ ウエルベックの精神分析に対する関係については、2005年9月29日に放送されたアルテ放送局の番組「思考の許可証 [Permis de penser]」のために行われた、ウエルベックとロール・アドラーとの対話を参照されたい。「基礎もなしに理論付けようとする人はベテン師です。それだけです。[...] 科学が姿を見せれば、精神分析は消えますよ。[...] 話すことが有益だという事実は、はっきり言って、そんなに驚くようなことじゃありませんね。[...] 少なくとも、夢を運命からのメッセージとして解釈していた分には、少しは面白かったでしょうよ。黒いカラスを見たなら、明日は一戦を交えなければならない、というように。ところが精神分析が絡めば、面白さはなくなって、実際のところ真面目に得るものなんて無くなってしまいうわけです。」また、この話題は彼のH. P. ラヴクラフトについてのエッセイにも登場している。「それでも彼 [ラヴクラフト] はフロイトの理論を「幼稚な象徴主義 [symbolisme puéril]」という二語でまとめながら、大事なところをメモする時間を作った。明らかに優れている表現を知らずとも、われわれはこの主題について数百ページもを書くことができるだろう。」H. P. Lovecraft, *Contre le monde, contre la vie*, [1992], Paris, J'ai lu, 2008, p. 61.

手がかりは、「冷笑主義」という観念の使用法の中に見つかる⁵⁹。名詞「冷笑主義 [cynisme]」と、その仲間の形容語句「冷笑的な [cynique]」は、ウエルベックに関する資料群の中でもっともよく使われてきたカテゴリーの典型である。ウエルベックの私的な話題から法人としての話題まで、彼の文体と物語の技術を介して、このカテゴリーはあらゆるレベルの分析を説明してくれる。その定義自体は非常に漠然としており、明確に説明されることはまれである。その不明瞭さ、そしていくつかの歴史的な理由によって、このカテゴリーは現時点において、ウエルベックと結ばれた想像世界の中で中心的な位置を占めることになった。それは、ウエルベックについて書いたり、熟考したりする人々の大勢が行き交う交差点に相当するのだ。だが、文脈に従って、[彼らの] 同じ意図が呼び集められるわけではない。アンチ・ウエルベックの人々にとって、この〔「冷笑主義」という〕用語は出来損ないの作家と同義である。ジャーナリストの側では、この用語はステレオタイプという意味に近い。非専門家の側からすれば、ウエルベックがその時代に及ぼす影響力の限界を示すのに役立つ言葉だ。専門家に関して言えば、この言葉は反対に、ベストセラー作家に文学的な威厳を与えるための非常にうまいやり方の一部である。また、ウエルベックに好意的な人々⁶⁰、つまりこの作家の「天才」の擁護者たちが、この言葉を彼らの語彙から追放したのは驚くに当たらないことだ。

⁵⁹ 「わたしは純真さを必要不可欠なものだと考えています。純真さは知性に対してというよりも、冷笑主義に対立しています。わたしはずいぶん前から確信しているのですが、冷笑主義とは愚かさのある特別な形なのです。」 Michel Houellebecq, « *C'est ainsi que je fabrique mes livres, un entretien avec Frédéric Martel* », *NRF*, n° 548, janvier 1999, pp. 207-208. また、2013年4月17日のBFMTV放送局のインタビューに答えて彼はこう語っている。「正直に申し上げて、わたしが冷笑的であったことなどありません。わたしは冷笑的ではなく、いつもキュニコス派の哲学に反対の立場です。ディオゲネスなんてちっとも好きじゃありませんし、要するに、彼には非常に反感を感じます。」 « Michel Houellebecq: l'invité de Ruth Elkrief », BFMTV.17.04.2013. [以下のリンクから参照可能。URL : <http://www.dailymotion.com/video/xz3gww> (参照日 : 2017年12月17日)]

⁶⁰ Noguez, *Houellebecq, en fait, op. cit.* ; Olivier Bardolle, *La littérature à vif (le cas Houellebecq)*, Paris, L'Esprit des péninsules, 2004 ; Fernando Arrabal, *Houellebecq*, trad. L. Arrabal, Paris, Le cherche midi, 2005 ; Aurélien Bellanger, *Houellebecq écrivain romantique*, Paris, Léo Scheer, 2010.

繰り返される言説上の第二の特徴をここで強調しておきたいが、それは、ウエルベックの専門家による批評のパラフレーズの次元に由来している。範例的にみえる次の論評から判断していただきたい。

ウエルベックはロマン主義的なジャンルを刷新しようとする。現代人の魂の徴候である無関心と虚無を描くために着想された、より平板で、より簡潔で、そしてより陰鬱な筋立てを発明しようとするのだ⁶¹。

彼〔ヴァン・ヴェゼマエル〕は、実のところ、ウエルベックの『闘争領域の拡大』から表現をこっそりと借用している。

小説の形式は、無関心や虚無を描くために着想されたわけではない。だから、より平板で、より簡潔で、より陰鬱な筋立てを発明しなければならないだろう⁶²。

論評によって見事にパラフレーズされた構成要素が意味するのは、われわれに言わせれば、魅惑が考察に勝るということである。魅惑は同じように、ジャーナリストたちによる要約の実践とも関係づけられるべきものである。パラフレーズに加えて、ウエルベック作品の魅惑は批評において、さらにより大規模な現象、つまり、規範的なものの誘惑へと至るのである。

見解の屈性

ウエルベック批評において繰り返される言説上の第三の特徴は、素朴な価値判断へと頻繁に密かに移行する点にある。適当に選んだ論評者たちの例は以下の通りだ。

⁶¹ Van Wesemael, *Michel Houellebecq*, *op. cit.*, pp. 17-18.

⁶² Michel Houellebecq, *Extension du domaine de la lutte*, Paris, Maurice Nadeau, 1994, pp. 48-49. [『闘争領域の拡大』中村佳子訳、角川書店、2004年、47頁]

われわれが個人主義にかくも固執するのは、個人主義がわれわれの欲望と、したがって、性と分かちがたく結びついているからである。性とは、完全にタブーのなくなった世界でわれわれに幸福をもたらさう唯一のものなのだから。こんなふうにウエルベックがほのめかすのは間違っていないとわたしは思う⁶³。

ミシェル・ウエルベックが考えるようなエロティシズムは、順応主義でもある。個人的に、そうしたものには少々うんざりしている。(率直な物言いを許していただけるなら) シャトーブリアン、ブルースト、クロード・シモンを読む方がもっと楽しい […] ⁶⁴。

ウエルベックがエギゾティスムの退廃を告発したことは正しいのだろうか。わたしはそうは思わない。彼の主人公たちはエギゾティックな態度の悪さによって特徴づけられている。 […] とはいえ、ウエルベックが西洋世界の自民族中心主義を告発したことは正しい。旅行についての物語を通して、彼はそれ以外の世界にまで広がっていく西洋世界を、分かりやすくしっかりとした批判にゆだねているのだ⁶⁵。

間違いなく、われわれは、少々ソビエト風の彼の小説の詩学と、ひどく荒削りな彼の言語を非難することはできるが、彼には野心もなければ知的な方法論もないと批判することはできないだろう⁶⁶。

しかしながら、この新しくあつらえられた冷笑主義の服に着替えても、文

⁶³ Per Buvik, « Faut-il brûler Michel Houellebecq », *Hesperis*, n° 4, automne 1999, p. 85. (強調は引用者)

⁶⁴ Schuerewegen, « He Ejaculated (Houellebecq) », *art. cit.*, p. 42. (強調は引用者)

⁶⁵ Van Wesemael, « Michel Houellebecq et l'effacement de la diversité exotique », *Michel Houellebecq, op. cit.*, p. 80. (強調は引用者)

⁶⁶ Olivier Bessard-Banquy, « Le degré zéro de l'écriture selon Houellebecq », *Michel Houellebecq sous la loupe, op. cit.*, p. 365. (強調は引用者)

学的才能を保証するにはつねに不十分なので、才能ある人々（ウエルベック）もときにはその才能を失うものだ⁶⁷。

ウエルベックは現代世界のおぞましきで他人の気を滅入らせる、鬱気味の画家である。彼はたしかにそのいやな顔を見せるが、彼は自分しか見ていない。ここがわれわれの同意の限界というところだろう⁶⁸。

われわれの小説家の言うことからは、たしかに差し引いて聞かねばならないことが沢山あるが、とはいえ、まるで彼が言うことが分からないなどという風に振る舞うことはできない。⁶⁹

[ウエルベックは] 物事の半分しか見ていない。大変重要なことを語る変人として読むぶんにはとても面白いのだが、間違いなく、手本とすべきような人物ではない⁷⁰。

ウエルベック自身の党派やクローンとともに、彼の小説はネオ・ヒューマン〔『ある島の可能性』に登場する、未来におけるクローン人間のこと〕の人生と同じくらい退屈なものになろうとしていた、とも言うっておかねばならない […] ⁷¹。

したがって、サドの作品がウエルベックの作品に比べて優れていることを認めざるをえない⁷²。

これらの例では、ほとんど抑えがたい形で、ウエルベック批評に規範的なものが

⁶⁷ Viart et Vercier, *La littérature*, op. cit., p. 362. (強調は引用者)

⁶⁸ Viard. «Houellebecq du côté de Rousseau», *art. cit.*, p. 129. (強調は引用者)

⁶⁹ Viard. *Houellebecq au laser*, op. cit., p. 111. (強調は引用者)

⁷⁰ *Ibid.*, p. 121. (強調は引用者)

⁷¹ *Ibid.*, p. 122. (強調は引用者)

⁷² Steiner, *Sade-Houellebecq*, op. cit., p. 194. (強調は引用者)

介入しているが、その原因は何だろうか。ウエルベックの小説の副次的な効果だろうか。「ホット」な受容の結果なのか。ジャーナリスティックな批評による悪影響なのか。われわれとしては第五の仮説を採用したい。すなわち、この原因とは、現在進行しているウエルベックの正統化とむすびついた「不安感」のしるしなのだ。彼の作品の大部分は、アカデミックな批評をまごつかせているように思われる。アカデミックな批評からすれば、ウエルベックは規範から外れた、位置づけが難しく、曖昧で、両極端で、逆説的で、偶像破壊的な作家にみえる傾向がある。ウエルベックはとりわけその作品の現代性と成功によって、また数多くの論争と訴訟のために、国際的な文脈で注目されているが、ウエルベックに関する批評の最初の受容、とりわけアカデミックな領域での受容は自明ではない。

行論の末にいくつかの結論が認められる。われわれがしるしづけた、繰り返される言説上の三つの特徴が示しているものは、ウエルベックという主題についてのジャーナリスティックな批評とアカデミックな批評の実に大きな類縁性である。この作家がメディアやテレビ番組を荒らすと、彼の作品の文学的関心をめぐって議論は熾烈を極める。この作家の例外的に目立った存在感に気を引かれた専門家たちは、ジャーナリストたちに遅れをとったことを、非常に豊かな学識と非常に独特な言説によって過剰に穴埋めしようとする。現代社会の状況について語る大学人たちにとって、ウエルベックの小説は論争の場だ。解釈方法のかかなりの柔軟さが示唆しているように、現代文学批評の一部は文学理論の理想に強くつながれたままであった。すなわち、ウエルベックの場合、彼が援用する文学という考え方が、彼の作品に何らかの反響を見つけようと苦労しているのだ。他方で、バラフレーズ的な反射はこの作家がかきたてる魅力のしるしであり、彼のことを解釈する立場の欠如のしるしである。この欠落への返答として展開される見解の屈性からは、彼に役立つよりもむしろ不利益をなすさまざまな緊張関係の中心にウエルベックがいることがわかる。なぜなら、そうした緊張関係によって、大学人が想定する作家たちの非常に私的なサークルから、よりいっそうウエルベックは孤立する傾向にあるからだ——もしそんなサークルがあるならの話だが。

こうした緊張関係はどんな方向へと進んでいくのだろうか。十年後にまたお会いしましょう。

Samuel Estier, « Happy 10th Anniversary : dix années de critique houellebecquienne », *Versants*, n° 60 (1), 2013, p. 93-107.

Reprinted by permission of Samuel Estier.

訳 = 八木悠允 (レンヌ国立科学技術大学)、西山雄二 (首都大学東京)

訳者解題 (八木悠允)

本論考はサミュエル・エスティエによる « Happy 10th Anniversary : dix années de critique houellebecquienne », *Versants*, n° 60 (1), 2013, pp. 93-107の全訳である。

本論執筆者サミュエル・エスティエは2017年現在、スイスのローザンヌ大学で助手を務める若き文学研究者であり、2016年には『ミシェル・ウエルベックの文体に関して——ある論争(1998-2010年)の回顧』⁷³と題した研究書を著した俊英である。本論と彼の著作を読む限り、エスティエの関心はミシェル・ウエルベックという作家自身に限定されるものではなく、むしろ文学受容の問題に傾いている。本論からも垣間見える通り、どのように文学作品を文学作品として受容し、消費し、価値付けるのかという問題は、古典的な問いでありながらもつねに現実社会に即した問題であり、今後の発展に期待が持てる研究分野である。

エスティエが冒頭で示している通り、フランスの現代作家ミシェル・ウエルベックに関する学術論文や批評は数多く存在する。その中でも作家論やテーマ批評ではなく、ウエルベック批評史に関するエスティエの小論を訳したのは二つの理由がある。第一の理由は、ウエルベック研究の現状を紹介したいという思いである。2015年のシャルリ・エブド襲撃テロ事件後に発表された『服従』⁷⁴が、その主題にイスラム教が含まれていたために、フランスのみならず、日本においても広く報道され、その日本語訳もたちどころに出版されたことは記憶に新しい。だが一方で、

⁷³ Samuel Estier, *À propos du « style » de Houellebecq : Retour sur une controverse (1998-2010)*, Archipel, 2015.

⁷⁴ Michel Houellebecq, *Soumission*, Flammarion, 2015. 『服従』大塚桃訳、河出書房新社、2015年。

エッセイは『H.P.ラヴクラフト』を除けば日本語訳されておらず⁷⁵、この作家がどのような人物であり、またどのような作家とみなされているのかという点に関しては日本語で知る手立てはあまりなかった。エステイエによる本論文は、今あげた二つの問いについて、明確な答えを出すことはないものの、資料的価値を持つ論文だと考え今回選んだ次第である。第二の理由はしかし、第一の理由への反論にもなるものだ。それはすなわち、この作家が果たして語るに値する作家であるかどうか、さらに敷衍して言えば、存命作家がいかにして文学的作家とみなされるのかという問題を考える上で、本論考がケーススタディーとして優れているという理由である。

ウエルベックに関してはすでに多くの日本語訳のあとがきに詳しいので、ここでは簡単に触れるに留める。また、この作家の生い立ちなどについては、非公認の伝記⁷⁶が出版されているばかりか、実母であるリュージー・スキヤルディによって、彼女の人生と息子ウエルベックに関するエッセイ⁷⁷が一冊刊行されている。特に当時「ル・ポワン (*Le point*)」紙のジャーナリストであったデニス・ドゥモンピオンによる伝記は、ウエルベックからの許可が最終的に受けられなかったものの、その綿密な調査による資料的価値が認められており、多くの研究者たちに引用されている文献である。

ウエルベックのデビューに関して言えば、詩人としては1988年の「ヌーヴェル・ルビュ・ドゥ・パリ (*La nouvelle Revue de Paris*)」誌における詩の発表⁷⁸が公式なものである。次いでエッセイストとしては1991年刊行の『H.P.ラヴクラフト——世界と人生に抗って』⁷⁹、小説家としては1994年の『闘争領域の拡大』⁸⁰ということに

⁷⁵ ウエルベックの代表的なエッセイは以下の三つ。Michel Houellebecq, *Rester vivant, La Différence*, 1991 ; *Interventions*, Flammarion, 1998 ; *Interventions 2*, Flammarion, 2009.

⁷⁶ Denis Demonpion, *Houellebecq non autorisé : Enquête sur un phénomène*, Libella Maren Sell, 2005.

⁷⁷ Lucie Ceccaldi, *L'innocente*, Scali, 2008.

⁷⁸ Michel Houellebecq, «Quelque chose en moi», *La Nouvelle Revue de Paris*, n°14, septembre, 1988.

⁷⁹ Michel Houellebecq, *H.P. Lovecraft. Contre le monde, contre la vie*, Rocher, 1991. 『H・P・ラヴクラフト——世界と人生に抗って』星塾守之訳、国書刊行会、2017年。

なる。表現者としてその起源をたどるのであれば、彼は1978年から映画を断続的に制作しており⁸¹、また俳優としてしばしば映画に出演してきた⁸²。さらに本論でも触れられているとおり、音楽活動や写真表現⁸³も手がけている。こうした彼のキャリアの多彩さを俯瞰するだけでも、「この作家は何者であるのか」という問いが浮かんでくるのは、ごく自然なことである。エスティエが本論で扱う多くの研究書、研究論文もまた、厳密に答えようとすればするほど言葉に窮してしまうこの問いと格闘している。つまり、問いの曖昧さを切り詰め、「この作家は文学領域においていかなる立場にいるのか」という論点にまで還元したすえに、なおも結論を下すことの困難さに直面しているのである。

本論はまず、ウエルベック批評における二つの極を示す。すなわち、アカデミックな批評とジャーナリスティックな批評である⁸⁴。エスティエは、この二つの極で

⁸⁰ Michel Houellebecq, *Extension du domaine de la lutte*, Maurice Nadeau, 1994. 『闘争領域の拡大』中村佳子訳、角川書店、2004年。

⁸¹ *Cristal de souffrance* (苦しみの結晶) が1978年、*Déséquilibres* (不均衡) が1982年に無声映画として撮影された。他にフランスの有料チャンネル「チャンネル・プリュス」向けに *La Rivière* (河) が2001年に制作されているが、以上三作品はDVD化されていない短編作品である。*La Rivière*は2016年にパレ・ド・トーキョーで開かれた展覧会 « Rester vivant » で公開された。また、小説『ある島の可能性』は作家自身の手によって映画化されており、これがウエルベックの手がけた最新の映画作品である。Michel Houellebecq, *La possibilité d'une île*, BAC Films, 2009 [DVD].

⁸² 特にGuillaume Nicloux監督の *L'Enlèvement de Michel Houellebecq*, Blaq Out, 2014 [DVD] では、ウエルベックが作家ミシェル・ウエルベック本人役として好演している。

⁸³ Michel Houellebecq, *Lanzarote, récit sur photographies*, Flammarion, 2000 (『ランサローテ島』野崎歎訳、河出書房新社、2004年) における写真作品だけでなく、他の様々な写真・映像作品などが、2016年夏のパレ・ド・トーキョーにおける展覧会で発表された。

⁸⁴ 訳文では「アカデミック」と「ジャーナリスティック」の訳語を採用したが、日本語においてはむしろ、「学術的」と「大衆的」に解されるかもしれない。本論のミニマリスト作家たちの例を参照すれば明らかな通り、文学領域における立場とは、ことフランスにおいては、大学で学術的に文学だとみなされるか、あるいは、大衆文学に留まるかのいずれかであるからである。ただし、日本語の学術と大衆では、その内容の程度問題にまでニュアンスが及びそうだと考えられたため、ここでは原文に忠実に訳した。

のウエルベック受容のグラデーションを素描した後、その批評の方法論の抱える問題とその原因にまで目を向け、最後には両極の批評の多くが、別の恣意的な物差しを用いてウエルベックを語らざるをえなくなっているのだと結論している。ウエルベックが既存の作家とはあまりに異なっているがゆえに、逆説的に、既存の作家や規範と照らし合わせねばならなくなっているという状況をエステイエは示しているのである。以下では、そのウエルベックの特異性についての補足を記していく。

まず、エステイエが軽く言及するにとどめている、「ウエルベック事件」についてだが、『素粒子』にまつわるこの事件だけでなく、それ以後も、ウエルベックは多くの騒動を引き起こし、その度にジャーナリストたちの関心をかき立ててきた。その流れについては日本語訳『地図と領土』⁸⁵のあとがきに簡潔にまとめられているので、引用しながら近年の騒動についても補足しよう。「有名作家としてのウエルベックの存在は、これまでスキャンダルと切り離せなかった。彼をいわばスターダムに押し上げた『素粒子』⁸⁶（1998年）をめぐっては、モデルとなったヌーディストクラブが刊行差し止め訴訟を起こしたし、作品自体、轟々たる論争を引き起こした。ゴンクール賞の候補となりながら受賞を逃した作者が、受賞作をけなすような発言をしたことで騒動はいっそう広がった。『プラットフォーム』（2001年）の刊行直後には、イスラム教に対する侮蔑的とも取れる表現に対し抗議運動が巻き起こった⁸⁷。『プラットフォーム』に関しては他にも、ヨーロッパ人によるタイへの売春ツアーという内容も批判的になった。また、ゴンクール賞を受賞した『地図と領土』（2010年）は、ウィキペディアからの無断引用が発覚し問題となり⁸⁸、2015年のシャルリ・エブド襲撃事件と同日に発表された『服従』（2015年）は、そのイスラム教化されるフランスという内容だけではなく、前年の12月29日にはすでに作品の

⁸⁵ Michel Houellebecq, *La carte et le territoire*, Flammarion, 2010. 『地図と領土』野崎欽訳、筑摩書房、2013年。

⁸⁶ Michel Houellebecq, *Les particules élémentaires*, Flammarion, 1998. 『素粒子』野崎欽訳、筑摩書房、2001年。

⁸⁷ 同訳書、396頁。

⁸⁸ この剽窃騒動に関しては以下のサイトに詳しい。

URL : <http://www.slate.fr/story/26745/wikipedia-plagiat-michel-houellebecq-carte-territoire> (参照日：2017年1月7日)

海賊版がインターネット上で違法に交換されていたという点でも話題になった⁸⁹。

これらスキャンダルに共通するのは、いずれの醜聞も作家の私生活の問題ではなく、作品と密接に関わっているという点である。だからこそ、「ジャーナリストイックな批評を一段高い点から見」ることによって、ウエルベックの作品を受容という観点から捉えた初期のアカデミックな批評をエステイエは評価している。つまり、ウエルベックに関するアカデミック批評は、その初期から作品内容だけではなく、作品外の世界をも射程に入れていたということだ。ウエルベック研究の中で、しばしば「ウエルベック現象 (phénomène Houellebecq)」という用語が使用されるのは、この射程の広さを示すためである。

次にエステイエはドミニク・ノゲーズを参照し、ウエルベック批評がいよいよ対象を厳密に作品テキストに定め、文学的批評が本格化していった時代を記述している。エステイエはそこからさらに分析手法へと目を向けるのだが、ここではノゲーズの『ミシェル・ウエルベックの実態』でも論じられている文体の問題について述べておこう。なぜなら、文体の問題はエステイエの主著の主題であるばかりでなく、多くの研究論文が取り組んできたウエルベックにおける大きなテーマのひとつだからである。1999年に、ノゲーズは『素粒子』を分析しながら、ウエルベックの文体を「[空白の] 文体 (style «blanc»)」と名付けている。ノゲーズは「[空白の] 文体とは、ときに不愉快であるか滑稽である正確さと、細切れの誇張表現による無味乾燥さでできた、あらゆる事実を病気の症状のように扱いつつ、そしてひどい、灰色の、黒い、さらに硫酸のようなユーモアへと横滑りすることできる「科学的な」声によって、明らかに強められている」⁹⁰のだと論じている。ノゲーズがここで論じているのは、専門用語を散りばめた科学的的文章と、口語表現も多い文章とが、ウエルベックの作品では奇妙にも混在していることの効果についてである。この混在こそが作家の文学的特徴だとみなす研究者は多く、位相の異なる文章の混合とい

⁸⁹ 海賊版騒動については以下のサイトに詳しい。

URL : http://aldus2006.typepad.fr/mon_weblog/2014/12/houellebecq-soumission-circule-déjà-sur-les-réseaux.html (参照日 : 2017年1月7日)

⁹⁰ Dominique Noguez, «Bien cher Michel...», dans *La Nouvelle Revue Française* n 548, NRF, 1999, p. 216.

う観点から多数の論文が書かれている⁹¹。その論争を振り返りつつ論じたのがエステイエの『ミシェル・ウエルベックの文体について』である。

この他にも、ウエルベックの作品にはいくつかの語るべきテーマ（本論で言及される性の問題や社会分析の他にも、オートフィクション性、ダーウィニズムなど）があるにも関わらず、ウエルベックは「未読への情熱」にさらされているがゆえに、「未読への激怒」もまた噴出している、というのが本論執筆当時のウエルベック研究の状況であった。その理由については、先に触れたスキャンダルのみならず、作家自身の言動にもあるのだと、本論で言及されるヴィアールは述べている。「[ウエルベックがよく読まれていない理由の]ひとつは、外国人嫌いです。確かにミシェル・ウエルベックは他人を不愉快にさせますが、実際のところ、外国人嫌いという病気に身を委ねているのです。[...] もうひとつの問題点は、彼のフェミニズムに対する関係です。彼がウルトラ・フェミニストではないということは、完璧にその通りです。彼が使う言葉はひどく手厳しく、そして皮肉ではないのです。恥ずべき母親によって子供が見捨てられることこそが、ウエルベックの生まれながらの大きなトラウマです。「母となれ！」とボードレーは「秋の歌」の中で書きました。ウエルベックの根底にある叫びもまた同じなのです⁹²。この手厚い擁護が示すのは、ウエルベックが私的な問題を抱えた作家として公的に発言を繰り返し、それがゆえに彼の小説がしばしばきちんと読まれていないという状況である。

この状況は実のところウエルベック受容だけでなく、ウエルベック研究にも影響を及ぼす。エステイエはウエルベック批評の手法的問題を指摘する前に、彼の文学的立場を「お互いがとても異なっていると自分たちで明言している分類し難い作家」だとまとめている。ここでいう分類の難しさとは、テキストを分析し、他の作

⁹¹ 例えばシモン・サン＝トンジュは、『闘争領域の拡大』におけるウエルベックの社会学的、文学的、そして科学的文章が織り交ぜられた文体を「言説の不均質性 [l'hétérogénéité des discours]」と名付けて論じている。Simon St-Onge, «De l'esthétique houellebecquienne», dans Murielle Lucie Clément et Sabine van Wasemael ed., *Michel Houellebecq sous la loupe*, Rodopi, 2007.

⁹² Bruno Viard, « Houellebecq est mal lu ! », *BibliObs*, 11.05.2012. 以下のリンクから参照可能。URL : <https://bibliobs.nouvelobs.com/romans/20120511.OBS5369/houellebecq-est-mal-lu.html> (参照日：2018年1月20日)

家と比較するさいの難しさと単純に等価ではない。むしろ問題はテキストの分析比較から得られる分類学的困難ではなく、「お互いがとても異なっていると自分たちで明言している」点にもあるのである。ウエルベックは、ジョルジュ・ペレックを除けば、ミニマリストやヌーヴォー・ロマンなど、現代フランス文学に対しては常に辛辣であり、彼が名前を挙げる作家のほとんどは19世紀の作家たちばかりである⁹³。無論、そうしたウエルベックの言動から距離を置きながら、その系譜を求める研究は一定の成果を収めてきた。サン＝トンジュによる『闘争領域の拡大』における語彙のロートレアモンからの影響の研究⁹⁴などはその好例である。

比較分析の困難さの一方で、純粋なテキスト分析にもまた困難がつきまとう。テキスト分析の柔軟さという手法的問題を指摘した後に、エステイエはこう続けている。「ウエルベックによれば文学という概念は、バルトの用語を繰り返すならば、意味の宙吊りを合目的とする言語についての作業とは正反対のものなのだ」。文学研究が科学である以上、そして研究の目的が作品テキストの分析である以上は、作家の発言の重要性は分析対象である作品テキストの重要性よりも後退する。例えばウエルベックがいかに精神分析を軽蔑し、拒絶しようとも、彼の小説を精神分析理論を用いて読み解くことは可能である。それは当然のことではあるのだが、二次資料、三次資料として作家の言葉が存在する以上、その作業に「不安感」がつきまとうことになる。

するとどうなるか。エステイエは二つの例を示している。ひとつは、多くの論評として挙げられている、ウエルベックを別の、より確からしい規範によって判断するという例である。ウエルベックが文学的に位置づけられておらず、さらに現在進行形で揺れ動くのであれば、すでにあるしっかりとした物差しによって判断しようという素朴な態度である。もうひとつの例はもう少し興味深い。それは、ヴァン・ヴェゼマエルの論評とウエルベックの文章の類似の例である。この例が示すのは、既存の価値観を用いることなしに語ろうとすると、ウエルベックを規範としてしまうということ、別の言い方をすれば、ウエルベックのようになってしまうということなのだ。

⁹³ Bruno Viard, *Les tiroires de Michel Houellebecq*, PUF, 2013, p. 8.

⁹⁴ Simon St-Onge, « De l'esthétique houellebecquienne » *op cit.*

以上が、エステイエの描く2013年当時のウエルベック批評の状況である。数年たった現在までに、ウエルベックは『服従』だけでなく、詩集『最後の海岸の形』⁹⁵、ショーベンハウアーについてのエッセイ『ショーベンハウアーの前で』⁹⁶を出版し、パレ・ド・トーキョーでは展覧会を開くなど、精力的に活動してきた。彼を取り巻く批評が変化したとは言い難いが、その後も研究書やシンポジウムは開かれ続けており、研究は盛んに行われている。残念ながら、いまだフランス国内大学における専門家の数は少ないが⁹⁷、多種多様な出自の研究者による国際的な研究が進められている。

本論冒頭でエステイエは、資料の数が増加するという存命作家研究の困難さを指摘しているが、彼の導く結論にもまた、同じ困難さが影を落としている。ウエルベックの文学的立場を明確にできないのは、単に彼の作品分析が進んでないからではなく、作家自身の発言や振る舞いも、少なからず影響しているからである。そして、ウエルベックの立ち位置が明確でないがゆえに、彼について語るさいに何らかの規範を求めてしまうということになる。

数多くの文学賞を受賞しているにも関わらず、いまだにウエルベックの文学的立場が不安定であるということは、おそらく、この作家の立ち位置を決定しようとするのが不自然だということなのだ。そして、ウエルベックの文学的に不安定な立ち位置にも関わらず、研究は一定の成果を収めてきた。それがウエルベックを停泊させるほどのものではないにせよ、である。

この成果の理由は、本論で引用されている多くの論評が示しているように思われる。それが批判にせよ、擁護にせよ、あるいは反射的でジャーナリスティックな反応にせよ、アカデミックな反応にせよ、読者に何かを言わせしめる——エステイエの言うとおりに——魅惑が、ウエルベックにはあるのである。そしてそれらの一見対立する批評というものが実のところ、部分的には折り重なり合って、ウエルベック

⁹⁵ Michel Houellebecq, *Configuration du dernier rivage*, Flammarion, 2013.

⁹⁶ Michel Houellebecq, *En présence de Schopenhauer*, L'Herne, 2017.

⁹⁷ 実際、本論で名前が上がった研究者のうち、フランスの大学教育機関に所属していたのはプロヴァンス大学教授であるブリュノ・ヴィアールのみである。

批評史を形成してきたのだ。

ウエルベックの最初の国際シンポジウムを開いたガヴァン・ボウは、そこでの発表論文をまとめた論集の序文で、デニス・ドゥモンピオンがウエルベックの伝記を書き始めた動機を説明する次の文章を引用している⁹⁸。「彼〔ウエルベック〕は何を考えているのか。彼が行き、見る世界は、容赦なく、喜びのないものなのか。自身のとてつもない著作権や、次の小説についてはどう考えているのか。彼を常に高く、力強くと印象づけ、また文学という共和国の天空に彼を位置づける、販売戦略についてはどう考えているのか。価値と基準が失われたという大勢の悲嘆の声についてはどう思っているのか」⁹⁹。ウエルベックにこれらの質問を投げかけ、答えが得られたところで、これらの問いへの情熱が消えることはない。というのも、それらの答えもまだしばらくは規範とはならないからだ。それもまた、ウエルベックが魅惑的な存命作家であるからなのである。

最後になるが、拙訳を熟読し、多くの誤訳を訂正して頂いた共訳者である西山雄二氏と、松葉類氏にはこの場を借りて厚くお礼申し上げる。

⁹⁸ Gavin Bowd, « Avant-propos », *Le monde de Houellebecq*, dir G. Bowd. Glasgow, University of Glasgow French and German Publications, 2006, p. IX.

⁹⁹ Denis Demonpion, *Houellebecq non autorisé : Enquête sur un phénomène*, Libella Maren Sell, 2005.